

石家荘・上海 2009

石川有三

予定の日程：11月（年休で出かける）、但し異常天候で前半は大幅変更！

10日（火）成田 JAL781,10:40→14:00 北京、そのまま石家荘市（河北省の省都、長野市と姉妹都市）へ

11日（水）河北省地震局で講演、午後：紅山地震観測所見学、夜、歓迎宴

12日（木）石家荘→地震予測研(北京)

傅 征祥(Fu Zhengxiang)、王曉青(Wang Xiaoqing)教授らと昼食会

昼食後、海南航空 HU7601 北京 15:10→17:05 上海(虹橋、730元：9500円)

13日（金）上海国際都市減災展（講演）

14日（土）午前、上海国際都市減災展、午後、自由

15日（日）午前、10時ホテル発、上海(浦東), JAL792,14:00→17:40 成田

10日：成田から北京へ、トラブルの始まり

チェックインし荷物を預け、免税店で土産の酒、タバコ、小物を買って、10時過ぎに搭乗券に記載された73番ゲートへ行くが、シカゴ行の表示が出ている。どうしたものかと思っていると「76番ゲートに変更された」という放送がある。ゲートの通路に張り紙でも出して欲しいものだ。ゲート番号が3番しか変わらないが、76番ゲートは一番端から2番目で73番ゲートへ行く距離の倍以上の距離を歩かされる。このときはまさか逆方向に歩かされるとは夢にも思っておらず、あまりに遠いので動く歩道を使ってしまふ。ところが、登乗時間に近くなると、北京空港周辺が雪のため、成田から飛び立てないと放送がある。何時に出発できるか、北京空港に問い合わせ中だと言う。とりあえず、北京空港へ私を迎えに来てくれることになっている河北省地震局の金学申（Jin Xueshen）教授の携帯に電話をする。そして、こちらのフライトが遅れることを伝えると、向こうも雪で高速道路が閉鎖されたため、列車で北京へ向かうことにした、と説明してくれる。フライトの時間が決まったら、また電話すると言って切る。

11時頃になって、食事券を配るので、食事をして14時に搭乗口に戻ってくるようにと放送がある。しばらくして食事券を配り出したので、搭乗券を持って早めに列んで1500円の食事券を貰う。搭乗ゲートが一番端だったのでレストランなどのある中央部に戻るのがとても長かった。ゲートへ向かうときは、動く歩道が続いているので距離が少し遠い程度にしか感じなかったが、自力で歩くとなるととても遠かった。私より早く食事券を貰った人たちは、のろのろ歩いているのでせつせと追い抜いて行った。それでレストランの所に着いたら列んでいる人は、数人しかいなかった。食事が出来る場所は、案内図を見たところ三カ所しかなく、一カ所はカフェでパンしかなく、もう一カ所はバーのような所で簡単な食事しか出来そうもなかった。残りの一カ所だけが普通の食事が出来る所だったので、そこへ入り、みそかつ定食とマンゴーのデザートを食べる。合計1580円。食べ終わって店を出ようとしたら、同じフライトの人たちが沢山列んで、店の外まで行列になっていた。早く来て良かった！

搭乗口に戻ったが、一人、二人いるだけ。その内の一人は、乗り継ぎが出来なくなると職員に相談していた。暫くして、16時に飛ぶというアナウンスがある。但し、北京空港で降りられない場合は、成田へ引き返すか、韓国のインcheonへ降りるのを了承で、という。まあ、私の場合は、最悪になれば河北省地震局での講演は止めて、上海へだけ行けば良いので気楽に待つことにする。とりあえず、金教授に電話してこちらの出発時刻を伝える。それから、講演用のパワーポイントが出来ていないので、ゲート前で電源が取れるところでパソコンを立ち上げて、せつせと資料を作る。しかし、1時半くらい頑張ったら疲れたので、4時前までイスで横になる。

16時にやっと飛び立った。機長の説明では、遅れを少しでも取り戻すため満州上空を飛ぶという。あれ？その方が近いなら、どうして常時使わないのだろう？と疑問に思う。17時20分に北京到着。確かに飛行時間は通常より短い。

河北省地震局の金学申教授(65才)が空港で出迎えてくれる。出口で見つけられなかったので、金教授の携帯へ電話する。向こうも出口にいるというので話しながら付近を歩いて探すと、電話で話しながら歩いている金教授を発見。金教授と駐車場へ向かいながら元の予定は変更した、と説明を受ける。元の予定は、空港から車で高速道路を使い石家荘市へ直接向かい、向こうで泊まるはずだった。しかし、高速道路が雪で閉鎖になったので、列車を使うことになった。そして、12日に北京から上海へ向かうが、12日の朝に石家荘市から北京へ向かうと何時に北京に着けるか分からない。だから、泊まるのは北京にして、石家荘へは、明朝向かい、夜、北京へ戻る、という日帰り日程に変更するという。まあ、30年ぶりに石家荘市に泊まれないのは残念だが、天候の問題なので仕方がない。また、紅山観測所の見学は高速道路が閉鎖されていたら難しい、ただこれは石家荘へ行ってから決めようと言う。私の方は、講演の通訳をしてもらった清華大学の顧林生さんが来れないことを伝える。すると「通訳無しで中国語でゆっくり話して良いから」と言われる。しかし、ゆっくりとか速く喋るとか、速度の問題じゃないんだけどなあ！まあ、居ないものはしょうがない。それから、先に夕食をしてからホテルに行くことになる。どちらも中国地震局のそば。車中で娘らに北京に着いたと日本携帯でメールする。

20時半頃レストランに入ると中国地震局地震予測研究所の王曉青教授と丁香淮教授（女性）がテーブルで待っていてくれた。二人とも初対面。王教授は私のことはよく知っているという。私は、機内食を食べたので、そんなに要らない、と言うが、やはり沢山注文してくれる。食べ過ぎの始まり！ビールも飲んで良い気持ちになる。金教授が「北京→上海」の航空券の領収書を渡してくれる。私が頼んでいたものだ。「航空券は？」と尋ねると、「今は全部電子チケットなので、紙は無い、窓口へ行けばいい」と言う。用意していた代金の730円を渡す。翌朝は6時にホテルを出発するので、早めに切り上げて隣のホテルへ行く。王教授は相談したいことは明後日の午前中に、と言うことで分かれる。

ホテルは、地震局の西隣の北衛招待所（元寿松飯店）。私の部屋は、入ると応接室があり、次に寝室とバスルームがあるという立派な部屋。ただ、LANの設備が無いのは困った。部屋の電話でダイヤルアップすることも考えたが、翌日の朝が早いので無理せず寝ることにする。

11日と12日：石家庄市へ往復と北京から上海へ



写真1：北京西駅ホームで。和諧号。

朝食抜きで6時過ぎ、ホテル出発。復興路でしばらく待つてタクシーを拾う。北京西駅へ。北京西駅で喫茶室へ入ろうとするが、従業員に「まだ営業していない」と言われ、出てくる。喫茶を探すが、見つからず、マクドナルドがあったので、そこにする。私は、チキンマックとコーヒー、金学申教授はコーヒーだけ。合計23元（8x2+7）=300円。2階席で食べて、しばらく時間待ちをする。そろそろ時間になり、席を立つが、金教授はそのまま出ようとする。金教授の65才という年齢からするとこういう店は余り入ったことが無いようだった。それで私は、「こういう店は客が自分でトレイを返却するルールです」と説明し、ゴミをボックスへ入れ、トレイを返却台へ戻した。すると見ていた金教授は、「こういう方式は、中国人には向かない!」と。（1元=13円くらい）

20分前くらいにホームへ行く。停まっている列車は、先頭車両が日本の新幹線とそっくりの外見だったので驚いた。写真を撮る（写真1）。切符の料金は、103元（動車組一等座）。30年前

の値段が9.8元だったことを金教授に話すと、今でも鈍行普通席は20元位と安いことを教えてくれた。しかし、昔も特快軟座と高級な座席だったので、物価が約10倍になっているわけだ。ただ、これは人民元での話で、日本円に換算すると面白いことに変化していない。30年前は、1元=160円くらいで、今は1元=13元だから、どちらにしても1500円くらいな訳で、興味深い。座席は、幅の広いゆったりしたシートで快適だ。

07:03に列車は北京を出て南へ向かうが、だんだん雪が多くなる。保定駅を過ぎたあたりから、どうも遅れている感じになる。石家庄市は北京から南西約200kmに位置する河北省の省都で長野市と姉妹関係にある。私の長野の知人も卓球交流で訪問している。冷凍餃子劇薬混入事件の餃子を製造していた天洋食品工業があり日本でも少し知られるようになった。金教授の携帯に河北省地震局のドライバーから電話が入る。迎えに向かっているが、雪で予定より時間がかかり列車の到着時刻に間に合わない、と言って来た。こちらは「出口でそちらが来るのを待っているから」と返事をする。しかし、こちらもだんだん遅れていることが分かってくる。訳もなくスピードを落としたり、小さな駅まで停まるようになる。



写真2：河北省地震局の建物。右の窓が小さい部分は後から増築した。

石家庄市に着いたのは、09:50。予定は09:03だから結局47分遅れ。北京では降っていなかったが、こちらは雪が降っていた。列車が大幅に遅れたので、結局、迎えのドライバーの方が早くて、我々を改札口で待ってくれていた。車の所へ行く通路も雪だらけで、結構滑る。車に乗り込んで河北省地震局へ向かうが、道路は除雪されていないので路面は滑り、超のろのろ運転。ドライバーの話では、昨日は交通渋滞がひどく、普段だと10分で行けるところが3時間かかったと嘆いていた。10時半頃やっと河北省地震局にたどり着く。30年前に来たときは、周りに何も建物が無く畑の中にボツンと5階建のビルがあったただけだが、今は周りは建物だらけ！玄関へ入ると大きな電光掲示板に私の講演案内が掲示されていた（写真3）。孫Pei卿副局長に会う。10時からの私の講演は、午後2時からに延期し、午後の紅山観測所の見学は中止することになった。金教授は、地震局の横にある自宅へ一度戻るといふ。手持ちのお金が無くなった！とか。午前中は、地震局内の見学をする。リアルタイムで観測しているのは、高感度地震計166点、強震計59点。2～3分で自動処理され、人がチェックして地震発生から4分以内に震源要素が決められている。華北地区でM4以上、中国全域でM5以上、周辺地区でM6以上の地震が起これば人民政府へ報告しているという。同じ地域を地球物理研究所や中国地震観測センターも震源を決めているはずなので、二重、三重になっていると思い、尋ねると、それぞれ別々に決めていくとのこと。もったいない話だ。

ちょっと早めに昼食に行く。地震局の横のレストラン。相変わらず沢山注文してくれて、最後にどの麺が良いかとメニューを示される。メニューの絵で見て普通っぽい麺を頼む。また食べ過ぎる。



写真3：河北省地震局の玄関掲示板に表示された講演会案内。



写真4：昼食時にでたマンゴーを鉢に使ったスープ。

食後、講演まで時間があるので休んでくれと地震局のホテルに案内してくれる。部屋に入って講演の準備をし、一応出来たのでネットに繋がらないか、無線LANを試すと繋がった。これで2日分のメールを受け取り、急ぐものは返信する。旅行メモも入力。

2時から講演。一つは日本全国の観測網と気象庁の緊急地震速報の紹介。これは中国語で講演したことがないので結構マズかった。聴衆が一人抜け、二人抜けと7、8人はいなくなった。辛抱強い中国人がこれだから、かなりマズイ！講演中に地球物理研の黄Fuqiongさんから中国携帯へ電話がかかるが、切る。次は、中国と日本の地震の特徴比較と四川大地震の話。新しい内容も増やしているが、主なところは過去に2回中国語で講演しているので、なんとかあった。出て行った聴衆も一人くらい。ただ、忍耐力の無い人はもう残っていなかったかも？中国の地震の特徴として、発生数が極めて少なく、巨大地震の発生間隔が数千年と長いことがあった。質疑では、緊急地震速報がどのくらいの時間に発表されるのか？情報は自動なのか？人が介入するのか？誤発表の割合は？などであった。講演後の懇談で、孫副局長は、「中国では直撃型なので、大被害の所は間に合わないなあ」と言っていた。また、一般的な質問として、地震前兆異常で動物の異常現象について、日本ではどのように見られているのか？と尋ねられた。それで、「日本は電車網が発達しており、地電流観測などは、ほとんど人工ノイズで自然の変化を観測できるのは夜中の数時間しか無理なところが多い。こういう中で生きている動物が人工ノイズより小さな自然の変化に敏感に反応するとは考えにくい。ただ、そういうノイズのない中国であれば、動物が感じて異常行動することもありうるのではないか。」と答えた。

講演後、河北省地震局周清良局長と会う。記念品を貰う。彼らは、来年1年間の地震活動予測をする1年1回の地震予知検討会をちょうど開いており、大変忙しいようだ。私が30年前に撮った河北省地震局のビルの風景写真を見せると、この頃の写真は誰も見たことがないという。それでコピーしたいというので貸してあげた。夕食までまたホテルで休むことになる。講演の後で、黄さんから「電話してほしい」と中国携帯にメールが来ていた。彼女の携帯へ電話すると、来年のインドで開かれるAOGSで四川大地震のセッションのコンビナーになって欲しいという。8月に開かれるので気候としては最悪だ、と知り合いのインド人に言われているので乗り気になれない。「検討するから、帰国して返事をする」と答える。雪は夕方まで降っていた。土産に河北省特産のタバコ「*石」と白酒「衡水老白干」67度を貰う。

夕食は宴会で、北京ダックも出た。主賓用のダックのスープも貰う。またいろんな料理が出て、石家庄独特のものも紹介されたが、よく分からない。水餃子も出る。これは昼食時、私がリクエストしたが、主食は麺が決まっていたので、またの時、と言っていたが、それを覚えていてくれたようだ。酒は白酒を飲み飲み、と勧められたが、50度以上と強いので小グラスで勘弁して貰い、もっぱらビールを飲んだ。ただ、21時15分石家庄駅発の列車で北京へ向かうので、早めの8時過ぎには宴会を終え、駅に向かう。相変わらずのろのろ運転だったが、車が少なく、比較的順調に駅に着いた。ドライバーの話では、今回の雪は50年ぶりの大雪だそうだ。50cm近く降ったそうだ。幹線道路は除雪車が走っていた。

駅について案内表示を見るが、すべて遅延になっており、我々の乗車する21:15発D4812北京西駅行の発車時間は未定になっている。待合室は人であふれているので、金教授は上へ行くと言って2階に上がりゲストルームへ入る。その中には、畳を縦半畳くらいの広さで寝れるところもあったがそこは一杯で、我々はソファの所で休む(写真7)。一人ソファで座って休むのが5元(65円)/時間。1時間半くらい待ったが、一向に発車時刻が表示されない。金教授が下に行って案内で聞いてきたところ、我々の乗る列車は、石家庄から南に150kmの所にある邯鄲市(邯鄲の夢の話の所)で折り返して来るものだが、そこへ向かう行きの列車がやっと石家庄を通過したばかりだという。順調にいて折り返してきておおよそ4時間はかかるので、ホテルで休もう、これから駅前のホテルを探してくる、という。それで私はゲストルームで一人残って待つ。かなり経って、金教授が帰って来て、「周りのホテルは、すべて満室でダメだった」とのこと。それで携帯電話を取り出し、2、3カ所へ電話している。65才とは思えぬ元気さ！そして、「地震局の車を手配しようと連絡したが、もう時間が遅すぎてダメだった。それで息子に来るように言ったので、まもなく来るだろう。それでどこかホテルか喫茶店で休もう。」と言う。そんな！こんな夜遅くに呼び出さなくても、この休憩室で十分なのに、と思って金教授にそう言ったが、「いや、こんなゴミゴミして汚いところでは十分休めない！」と言って受け付けてくれない。それで暫くして息子さんから金教授の携帯に電話が入り、駅に着いたと。



写真5：上島珈琲店の個室の中。かなり広い。立っているのは金学申教授。

我々はゲストルームを後にして、駅の外に出る。金教授はすぐ息子さんの車を見つけて合図する。息子さんの奥さんも一緒に来ていた。夜遅く夫婦を呼び出してしまい全く申し訳ない。自家用車を持っている息子さんは、法律家(律家)。多分、弁護士ではないかと思われる。後部座席に乗せて貰い、出発。金教授は、ホテルかどこか休むところは無いか？と言うが、息子さん達もなかなか思い当たらない。一カ所ホテルが思いついて、そこへ向かうが、もう閉まっていた。周辺をぐるぐる回るが、良いところが見つからない。いろいろ金教授と息子さん夫婦が議論し、駅近くの喫茶店にすることになる。到着し看板を見ると「上島珈琲」。「同じ名前の店が日本にもあるよ」と私が言うと、息子さんが「これは台湾が本店」と言う。私は、車を降りて玄関の階段を登ろうとして、滑って転倒してしまった。階段にマットが敷かれていたが、マットの無い所を登ろうとしたら、完全に氷の面になっていたようだ。持ってた荷物がクッションになり何も怪我は無かった。店に入ると「上島珈琲、台湾起



写真6：上島珈琲で出されたコーヒーメーカー。右がアルコールランプ。

クレジット・カードをよく使う」と言う。私は「日本も同じだが、私は日本航空のマイレージにして貯めている」と説明した。奥さんの妹さんが神戸で中華料理レストランを開いているそうだ。店の面積が10平米と狭いが焼餃子が好評でよく売れているとか。



写真7：石家荘駅のゲストルームで休憩する人達。深夜3時前。

源」と大きく壁に書いてある。あれ？日本のUCCは台湾起源なのかな？と思う（帰国後、ネットで調べると台湾にある偽UCCだった）。息子さんが部屋を頼む。案内されたのは広い個室（写真5）。4、5人が座れるL字型のソファが中央にあり、奥に4、5人掛けのテーブルもある。ドアはガラスでは無く、外からは全く見えない。一体、どういうときに使うのだろうか？と疑問に思ってしまう。いろんな料理やデザートも頼める。「何か食べたいものは？」と聞かれるが、こちらは宴会で食べ過ぎているので「コーヒーだけで良い」と答える。コーヒーセット4人分を頼む。それだけだと250元(3300円)くらい。そのコーヒーは見慣れないアルコールランプ式の凝った装置（写真6）で、私が珍しそうに見ていると、息子さんが「これはイタリア式だ」と説明してくれた。その後、コーヒーを追加したので550元(7200円)だった。こういう店は、午前2時が閉店と法律で決まっているそうだ。その個室にいる間、金教授は邯鄲駅や一つ石家荘に近いシン台駅へ電話し、列車が通過したかどうかを確認している。邯鄲駅を出たらその2時間後に、シン台駅を出たらその1時間後に石家荘駅に着くから、それを目安に我々が駅へ行こうというのだ。息子さんが、室内では無線LANでネットが使えると教えてくれたので、私はメールをチェックし、いくつか返事を出す。また、紀行文のためのメモも入力する。閉店時間の2時が近くなり従業員が来て、支払いを、と言う。そして、また来るなら1割引きのクーポン券が有ると言われ、息子さんが1000元のクーポン券をクレジット・カードで買う。奥さんは、「使った額でポイントがたまり、銀行が品物をくれるのでク

クレジット・カードをよく使う」と言う。私は「日本も同じだが、私は日本航空のマイレージにして貯めている」と説明した。奥さんの妹さんが神戸で中華料理レストランを開いているそうだ。店の面積が10平米と狭いが焼餃子が好評でよく売れているとか。

深夜2時までが営業時間なので、01時52分に店を出る。列車は邯鄲駅は出発したのは分かった。店を出るとき店内は真っ暗、最後の客だった。息子さんの車で駅まで送って貰う。しかし、駅の案内にはまだ北京行きの列車の時間の表示はない。また、ゲストルームへ行く。金教授はチケット係に一人だけだと言って、私の分だけ料金を払い、自分はちょっと見てくる、と言って出て行く。かなり時間が経って、受付係の女性が、「D 4812 北京西駅行」、「D 4812 北京西駅行」と私たちの乗る列車の案内がされていると叫んでいる。金教授がまだ帰ってこないで、携帯で呼び出そうと番号を押すと、同時に入口に現れたので、急いで電話を切る。

金教授とゲストルームを出て、改札口の方へ向かう。真夜中なので人の数はかなり減っていたが、まだ沢山の人が駅の中にいた。改札口で金教授がホームへ入れないのかと尋ねると、無愛想に「放送があるから待て」と言われる。それで待つことにするが、広い部屋に沢山の人がいたが、イスが空いている所がポツポツあり、離れていたが二人とも座れる。そしてやっと我々の乗

る予定の列車が「3：12」と出発予定時刻が表示された。二人で顔を見合わせて喜ぶ。ところがしばらくすると「3：12」という表示から、「3：22」に変わり、また「3：32」と変わる。「もう～どうなっているんだ！」と思っていたら、3：20過ぎにホームへの通路を開いてくれた。慌てて他の人たちと一緒に二人でホームへ降りていくと列車は来ていて、乗り込む。乗車すると白人と中国人女性が列んで座り、我々の席に足を出して休んでいた。「ここは我々の指定席だよ」と告げて、座席を反転させ進行方向に向け、座る。空きは少ししかなかった。切符を買った人はみんな6時間以上待っていたということだろう。この忍耐強さには驚く！暫くして列車は発車した。時刻を見ると3：29だった！すると「3：32」の表示を信じた人は乗れなかったかも知れない。

3：29、石家荘駅を出発（結局、6時間14分遅れ）。

4：44、保定駅に到着

5：03、保定駅出発（19分も停まっていた！）

6：15、北京西駅に到着。

結局、2時間46分かかっており、30年前より所用時間がかかっている！途中、切符の検札も来なかった。北京西駅に着く10分前くらいに金さんが王教授と携帯で話をしていて、途中で私に携帯を渡す。王教授は「今日、何時に会えるか？」と尋ねるので、10時半にする。11時半からは昼食会。

北京西駅からタクシーで北衛招待所へ。タクシーの運転手が助手席に座った金教授に昨日のことをぼやく。「昨日は無茶苦茶だ！2元(26円)にしかならなかった。2元だよ！2元！2元で何が買える！」と。え～！、1日で本当に2元なのかな？私は思っていると、金教授はなだめる。そのうち後部座席に座っているのは外国人だ、とか運転手に教えると、運転手は私の方をちらっと見て、話は理解できるのか？と金教授に尋ねている。いろいろボソボソ話しあっていた。北衛招待所1081号室(金教授は1010号室)へ戻り、風呂に湯を入れながら、荷造りをする。部屋を引き払うので全部を詰めないといけない。北衛招待所はLANのインターネットが出来ないが、ダイヤルアップを試す気力もない。風呂に入り、荷造りもほぼ終わり寝ることにする。8時前なので2時間寝られる。アラームを中国携帯で10:05、日本の携帯で11:10(こちらは日本時間)にして寝る。

10:10頃に携帯の音で目を覚ます。寝ぼけていてアラームだと思って起き、荷物をまとめ、部屋で待つが王教授は来ない。10:50頃になって、日本携帯が日本時間だったので1時間間違えて早かったことに気がつく！実際は09:10頃に起きたのだ！そのときに日本携帯に着信メールがあって、その着信音をアラームだと勘違いして起きてしまったのだ！寝ぼけているといつも変な間違いをしてしまう！ということは1時間しか寝ていない！！まいったなあ！ただ、時間が出来たので、先に金教授の所へ行きお土産を渡す。部屋へ行ったとき金教授はまだ寝ていたようだ、悪いことをした。

10:30、地震予測研究所の王曉青教授と傅征祥教授が私の部屋へやって来た。私の泊まった部屋は、応接室付きだったのだが、金学申教授が打ち合わせが出来るようにと考えてこのような広い部屋を用意してくれていたのかも知れない。傅征祥教授は、昔から知っているが、彼はもう退職しているという。ただ、研究ポストはあり、研究はしている(中国独特の制度)。彼らは、アジア歴史被害地震の研究をしたいので、協力して欲しいという。気持ちは分かったが、こちら東アジアの歴史地震研究プロジェクトを2つ申請中なので、バッティングすると困るのでこちらで申請しているプロジェクト案の説明をする。すると先方はアジア全域で、被害データも含めた広範なものを考えており、私らのものと直接バッティングしないことが分かった。ただ、私はこれ以上正式に研究参加は出来ないが、個人的になら協力すると答える。訪日調査をしたいと言うので、日程案などを協議する。韓国の方も調べたいというので、韓国の研究者を紹介すると約束する。あとはメールでやりとりすることにする。

11:30、近くにある昨日行ったレストランへ歩いて向かう。今日は部屋が予約されていた。地震予測研究所の張国民教授もやって来た。張国民教授は、中国地震学会の理事長でもあるので、「今後も日中両国の地震学会の交流を深めましょう」と挨拶する(私は日本地震学会の副会長)。地球物理研究所の朱伝鎮教授はまだ来ていなかった。誰かが、「今日は地球物理研で地震予知検討会が開かれているので、朱教授は遅れるのではないか？」と言うと、「大丈夫だよ、検討会が長引いても抜け出してこの昼食会には来るだろう」と誰かが答えていた。そのうち朱教授がやって来て、全員揃う。食事中の話は主に朱教授の大腸ガンの話。どうやって見つけたか、とその後の経過を説明。現在、術後3年半経過したので、ほぼ大丈夫だろうと言う。あと、健康のために運動しないといけないという話で、私は卓球をしていると言うと、王教授も昼休み卓球をしていると言っていた。機会があれば対戦してみたいものだ。



写真8：レストランの前で、左から王曉青教授、朱伝鎮教授、私、傅征祥教授、金学申教授。南京東路では、中はセーターで帽子をかぶっていたが、この防寒コートが目立ったようだ。

てくれ、対応するから」と言ってくれる。上海で迎えに来てくれる腰雲鴻さん(上海国際広告展覧有限公司)にも遅延出発の時刻を携帯メールで送ったら、了解したとメールで返事が来た。

17時過ぎ、やっと搭乗し、上海へ向かう。食事時になったので機内食が出た。

19時半過ぎ、上海に到着。飛行機が降りる前に、気温が19度という機内アナウンスに驚く。先ほどまで零下の世界だったからコートやセーターを脱ぐ。降りて携帯の電源を入れると日本携帯は自動的に北京時間に切り替わった。北京では切り替わらず日本時間のままだったのに、地域で違うようだ。空港には腰雲鴻さんが迎えに来てくれていて、訪中前に私の写真を送っていたのですぐ私を見つけてくれる。車でホテルへ向かう途中、明日の予定を簡単に話してくれる。

13:00、レストランを出て、みんなと別れ、王教授が手配してくれた地震予測研の車で、北京空港へ向かう。王教授の大学院生が同行してくれる。助手席に座った彼が私に、「後ろでゆっくり休んでください」というので、言葉に甘えてリュックを枕に横になったが、空港に近くなるまで全然気がつかず、熟睡したようだ。

空港で車を降りて海南航空の所でチェックインをしたが、ゲートがどこかまだ決まっていない、14時半頃表示されるのでそれを見てくれ、と言われる。とりあえず搭乗エリアへ向かい、送ってくれた大学院生と分かれる。搭乗エリアで待っていたら、15:10のフライトがまた遅れ！

17:10発と表示された。また余分に2時間待つわけだ！ラウンジを捜すが、国内線搭乗エリアなので二カ所しかなくて、私の持っているカードでは入れなかった。空港側ならあったので早く搭乗エリアへ入ってしまったのが、失敗。待っている内に王教授と朱伝鎮教授から携帯に電話が入ったので事情を説明する。王教授は、「何か手助けが必要になったら、連絡し

私の講演時間は30分間のように聞いた（どうも聞き間違えて実際は20分だったようだ）。講演会后、関係者で今後の相談をするので、それにも出席して欲しいというので、OKする。夕食を勧められたが、昼に宴会をし、夕方機内食も食べたので断る。明日は、8時半にロビーで会う約束をする。チェックインし、カードキーと朝食券を受け取る。あとで確認すると二人分あるが、2日分しかない。3泊するのだが???、多分あとで、もめそうだ。

11階の部屋(1131号室)に入りインターネットをしようとするが、繋がらない。室内にLANケーブルはあるが、課金方式なので申し込まないといけないようだ。1分/1元、24時間=100元(1300円)と書いてある。フロントに電話して尋ねるとフロントへ来れば、IDとパスワードを教えてくれるという。フロントへ行って申し込むと200元保証金を取られた。部屋へ戻ろうとエレベーターに乗り込み11階のボタンを押す。すると若い女性がエレベーターに乗り込んできて12階のボタンを押す。さっきロビーに居た女性だ。私が11階で降りると少し遅れて降りる。あれ、1階違うよ、と言おうかと思ったが、私の方へ歩いてくる。私は自分の部屋の方へ向かうと、後ろから「マッサージどうですか?」と怪しげな日本語で話しかけてくる。え〜!!!これまでホテルの出入口でカードを配られたり、部屋の電話にかかってくることはあるけど、こんなのは初めて!慌ててドアにカードキーを通すがダメ。彼女は「どうしたの?」と言ってこちらへ来る。また繰り返してもダメ!よくドアを見ると部屋番号が違っていた。焦っていたのだ!こんどは部屋番号をよく見て、自分の部屋の所へ行きカードキーを通し、やっと成功。そうしたら彼女は近くに来て「マッサージ、気持ち良いよ!」とますます熱心に言う。こちらは急いでドアを開け、部屋へ滑り込み、「いらない、いらない」と言ってドアをすぐ閉める。いや〜、慌てた!部屋の所までああいうのが来る時代になったんだ!このホテルはそれなりのレベルだと思ったけど、展示会場に付置されているから、そういう客が多いのだろう。部屋で翌日の講演会用パワーポイントを整理する。

13日、減災講演会と上海市地震局へ

8時半にホテルのロビーに降りるが、腰さんは見つからない。腰さんの携帯へ電話すると「今から迎えに行きます」と言うので待っていたら、すぐやって来た。それで付いていくと、雨なので開会式は建物の中でののだそう。待合室の前に受付があり、そこで受付をすると胸ポケットに花を刺してくれ、8番の番号札を渡してくれた。番号札は何に使うのか説明がないので何なのか分からない。待合室に入ると主賓はい人たちが5、6人雑談している。私は貰った資料を見る。厚さ7~8mmの冊子がプログラムや展示の説明書だった。その中に講演の順番が書いてあるが、時間が書いていない。私が日本でいるとき腰さんからメールで貰ったプログラム案は、午前の最後だった。余り変わってはいないのだろう。しばらくして清華大の顧林生さんがやって来た。彼は成都から昨日の夜中に上海に着いたという。それで私の講演の通訳を頼むと、腰さんから言われているからやります、と快諾してくれた。彼は、地震関係の専門用語もよく知っているのだから、彼が通訳してくれると安心。

開会式が始まるというので、展示会場へ連れられて行った。行った先の広い所に屏風を立ててあり、その周囲に人が集まり、屏風の前の空いた空間の床に番号が貼ってある。1番から8番で、ただし、1番が真ん中でその右に2番、1番の左に3番、そしてその両側に4番、5番と中国風に番号が振られている。そこに主賓が案内され、番号通りに立っていく。従って私は一番端の8番の上に立った。貰った番号札は、そういう意味だったのだ。開会式が始まり、中央の3人がそれぞれ挨拶する。民政部減災センター副主任の閻志壮さんなど。その後、順次主賓が紹介された。私も紹介され、一步前へ出てお辞儀をしたが、中国語だけでなので、中国語の分からない人だと困っただろうなあと感じてしまった。その後、8人によるテープカットがあり、開会式は終了した。

式典が終わるとまわりで名刺交換が始まる。集まっていた中で唯一と思われる白人が目立っていたが、彼が私に近づいて来て「日本人ですか、英語が良いのか、中国語が良いのか?」と尋ねる。私は「どちらでも構わない」と答えると、流ちょうな中国語で話し始める。貰った名刺には「Andrew Billard 米国上海総領事館商務領事」と書いてあった。「安子龍」と中国名まで書いてある(読み方は、アン シャオロン)。領事館の人なので驚く!日本の領事館の人は見あたらない。中国語が上手なので何年滞在しているのかと尋ねると、「7年」という答えが返ってきた。私は1年だから敵うわけがない!一緒にいた女性は中国系のようなだが、やはり米国領事館の職員、沈霞(Jane Shen)さんという。



会場を引き上げ講演会場へ入り最前列の端の方に座っていると Andrew さんが入ってきて、隣に座っていいか?という。目立ち過ぎて困るけど、断るのは悪いので、仕方無く「どうぞ」。中国語が上手なので感心してそう言うと、彼は、「日本人が中国語を学ぶ場合、とても有利だ。一緒に語学学校にいた日本人達は漢字を覚えるのに全然苦労していなかった、自分とはとても苦労した」と。それで私は、「確かに見て意味を知るのは簡単だけど、発音は日本人にはとても難しい」と話すと、彼は「そうかも知れない、我々には似ている音が多いので発音は楽だ」と言っていた。

講演が始まり、中国のいろんな災害についての説明があった。一般的なものなので大抵は知っていたが、一つ面白い話があった。それは2005年5月に北京であった雹の被害。ピンポン玉をやや大きくした程の雹が降ったそうだが、車の車体がへこむなどの被害が出たそうだ。特に鉄板が薄い日本車と韓国車に被害が多かった、と言う説明があった。やはり、鉄板の厚さが違うんだ！一方、冊子をいろいろ見ているとおかしな事に気がついた。後援団体に「日本地震学会」は書かれているが、「中国地震学会」は書かれていない。不思議だ？日本地震学会がこの展覧会開催団体から後援要請を受けたときにそれを承諾した理由は、上海市と都江郷市という公的機関が主催していることと、中国地震学会が後援していることがあったからである。初期の宣伝ホームページには、「中国地震学会」の名前が掲載されていたのだ。あれ？これは中国地震学会の秘書長に尋ねないといけないなあ、と思う。また、進行中、テレビ局のカメラマンとおぼしき人が Andrewさんと私をねらって撮影していた。やはり Andrewさんが隣に来たのは不味かった。白人は一人だから彼を撮影したがるのは仕方が無いが、隣にいる私までターゲットにされてしまった。

自分の講演は11:20前から始まった。午前中の最後だと思っていたので、十分時間があると思っていた。最初に中国語で挨拶し、日本語で講演し通訳を顧林生さんにして貰うことを説明した。中国の地震と日本の地震について特徴の違いを解説し、四川大地震の特徴について解説した。ところが、途中で演壇横のドアの所から「5」と書いた大きな紙がこちらに向けられた。手元の時計を見ると11:35くらい。あれ？12時にはまだ時間があるのに？と思ひながら喋っていると、腰さんがこちらに向かって時間が余り無い、というジェスチャーをしている。あれ？よく分からないけど、切り上げようとして重要ではない数枚は説明を止めて終わる。席に戻ると Andrewさんが興味深かったらしくメモを取っていて、「震源断層というのはどういうものですか？」と質問された。

午前中のセッションが終わると上海市地震局の呂恒俊さんが私の席にやってきた。「こんにちは！何時から地震局へ行きますか？」と尋ねられる。顧さんも一緒に地震局へ行くというので、相談して「昼食後にすぐ行きますから、13時に出ましよう」と答える。呂さんは、「ではロビーで待っています」と言って離れていった。私と顧さんは、昼食会場へ案内された。

昼食は10人以上で円テーブルを囲む。私に話しかけてきた鄧衛力さんは、成都市観光局の局長さん、JICA研修生で横浜に3ヶ月滞在したことがあるそうだ。日本語はほとんどダメ。成都に日本の航空会社が乗り入れてくれないのが不満だそうだ。Andrewさんと席が真正面が一番離れていたが、話が合い、盛り上がっていた。Andrewさんを「シャオロン」、「シャオロン」と呼び、気に入っていた。Andrewさんは、自分の紹介で、天津の南開大学を卒業したことや、中国滞在7年目、内モンゴルにおじいさんがいて、そこでの体験などを面白そうに喋る。奥さんが中国人かも知れない。私が聞き取れない部分もある鄧衛力さんの話を即座に返す。それを横で聞いていた顧林生さんは、「Andrewさんはすごい！これほどの人は日本の大使館、領事館には居ないです。これくらい中国に溶け込まないと！日本の領事館の人は見習わないと！」と感心していた。私は、都江郷市緊急管理室の宋慶國副秘書長、上海市商務委員会の羅志松さんと名詞を交わす。1時近くなってきたが、まだ暫くかかりそうなので、呂さんの携帯に電話して、13:10頃になると伝える。そして結局、料理が間に合わず、主食が出る前に午後のセッションを始めるため昼食会はお開きになった。

13:15、昼食がお開きになるとすぐ会場を抜け、上海市地震局の呂恒俊さん、顧林生さんと私で上海市地震局へ向かう。上海市地震局は元々町中にあったが、建物が古くなったので全面改築中。そのため臨時に浦東にある浦東地震監視観測センターに移転している。私は従来は場所は何度か見学したりしているが、そのセンターは初めて。呂さんによるとタクシーで行っても、地下鉄で行っても1時間くらいかかるという。我々はタクシーで行ったが、それほど混んでいなくて1時間かからなかった。料金は85元(1100円)だった。



写真II：上海市地震局浦東地震監視観測センターの前で清華大学の顧林生さんと。

上海市地震局浦東地震監視観測センターの前で顧さんと二人で記念写真を撮る。外事処の許彬彬さん、顧さんの友達の蔡長春さん（上海市地震局浦東地震監視観測センター副所長）と会う。私の知っている人はほとんど退職している。ここでも地震予知検討会の最中で、主人に会うことは出来なかった。地震観測ネットワークの処理室を見せて貰う。観測点分布を見ると海域に3カ所点があるので、どういう方式か尋ねると槽式観測点だそうだ。データは衛星通信。そう言えば以前新聞記事で読んだ覚えがある。一番沖合（上海東岸から南東へ約300km沖合）の八角亭観測点で記録された地震波形を見せて貰うが、海底観測点独特の特徴を示していた。そのほかの部屋を見て回り、緊急対応室やオペレーション室も見る。

会場に戻りたいので3時過ぎに呂さんにそう言って地下鉄での帰り方を教えて貰う。地下鉄は「人民広場」で一度乗り換えれば良いだけで簡単だが、センターから最寄りの地下鉄駅までが距離があり、それが問題らしい。センターの場所は、辺鄙な所なのでタクシーはほとんど通っていないらしい。ある人が自分の車で私たちを送ってくれるというので、その好意に甘えることにする。ただ、最寄りの地下鉄まででなく会場まで送ってくれるという。う～ん、大丈夫かな？と心の中で思うが、好意で言ってくれているので、断るわけにも行かず、そのままお願いする。

奥さんとその友達も一緒に乗って行くというので結局3時半頃センターを出る。私は助手席に座り、あとの3人は後部座席に座った。顧さんは、「5時には会場に戻りたい」と告げる。「まあ、大丈夫」という返事だった。私はもっと早く戻りたかったが、黙っていた。運転はまあまあうまい。その人は地震局が移ったため、今は毎日80km運転して通っているそうだ。時間がラッシュになる前だったので、比較的順調に走り、市の西部に入り、一度高架道を降りて奥さん

の友達を下ろす。そして、もう一度高架道に戻り、会場の近くで高架道を再度降りる。ただ、どうも正確な位置を知らないらしい。後ろに座っている奥さんに道を知っている人に電話で教えて貰え、と指示する。高架道から降りた大通りは、漕宝路で、会場は近いらしい。走りながら奥さんが電話で聞いた道を注意しながら見るが、右折せよと言ったときは、直進コースにいて右折できず、通り過ぎる。Uターンするため直進するがなかなかUターン出来る所が無く、かなり行ってやっとUターン出来る。それで先の曲がるべき道まで戻って来たが、なんと左折禁止(右側通行なので、日本なら右折禁止)。仕方ないのでまたUターン出来るところを探して直進する。ところが渋滞に入る。運転している人は助手席のボックスからカーナビを取り出した。奥さんが電話で聞いたと言って場所を説明すると、一言「信用できない!」。家に帰ってから夫婦げんかにならなければ良いが、と心配になる。それでナビをセットするが、ときどき車が進むので後部座席の奥さんに渡して会場の位置を捜すようにと頼む。ところが我々の乗っている車はちょうど幅の広い高架道の真下で衛星の電波が届かない。奥さんは「私の所だと電波が来ないよ、そっちで見て」と運転席の主人に渡す。渡されたご主人は「そんな!こっちだって一緒に電波は受からないよ」。そんなことをしながらも15分くらいかかっても20mくらいしか進めない。前方は、ずっと車が連なっていて何時Uターン出来るか分からない。多分、降りてタクシーを拾った方が早いだろうと思うが、口には出せない。途中で顧さんの携帯に2度、腰さんから電話があり、何時戻れるのか?今、どこにいるのか?と尋ねられる。5時も過ぎてしまった。とうとうご主人が「顧さん、このまま進んでも何時になったらUターン出来るか、分からない。降りて逆方向へ歩いた方が早いと思う。会場まで送れなくて、悪いけど」と言い出した。それで顧さんと私は、礼を言ってすぐ車を降り歩道まで行った。するとすぐ空きタクシーが来たのでつかまえて、会場へ戻る。車を降りた場所から会場まで、それほどかからなかった。やはり近くまでは来ていたのだ。ただ、固定のカーナビが付いていないのに、道路地図を持っていなかったのには驚いた。運転する道が決まっているから地図は要らないのかも知れない。

ホテルに戻れたので腰さんに連絡し、顧さんと私の交通費を支払って貰う。腰さんが指示して若い女性(まだ、10台のよう、私から見ると女の子という感じ)が現金を数えて支払ってくれた。私は日本からの航空賃なので人民元のお札を沢山貰い、金持ちになった気分。それで私は「今後のことを話し合う会議はどうなっている?」と腰さんに尋ねると「それは無くなったので今日はもう終わりです。これからどこか行かれますか?食事をされるなら手配しますけど?」と言う。私はもう行くところが無いので、「このまま食事に行きます」と答えると、腰さんは若い男を呼び出して、私を食事に案内するように告げる。彼は腰さんの部下で余星照(Yu Xingzhao)さんと言う。顧さんは、今夜の便で福建省へ飛ぶと言うので、そこで分かれる。彼は、プロジェクトをいくつも抱えていて、とても忙しい人だ。

余さんがホテルの前の通り(漕宝路)で流しのタクシーを拾おうとするのが全然捕まらない。18時と通勤ラッシュになっていて時間帯が悪いということもあるが、日本の駅前の客待タクシーの行列を見慣れていると経済活動の違いを感じてしまう。今回、北京では雪のため車が比較的少なく感じたが、2007年に来たときはもう無茶苦茶で、オリンピックに向けたものすごい高揚を感じた。今回上海も来年の万博があるので経済活動が活発なようだ。夕方から急激に冷え込んできていて、とても寒くなり、彼も外で待つのをあきらめてホテルへ戻ってきた。かなり待ってホテルへ客を送ってきたタクシーをやっと捕まえることが出来た。



写真12: 余さんと徐家匯のシャブシャブ店で。

余さんは付近のレストランを知らないようで、タクシーの運転手に良い店はないかと尋ねている。行き先に告げた徐家匯は繁華街。タクシーの運転手はいくつかビルの名前を告げて、その中ならいろいろレストランがあると説明していた。余さんはあまり分からないらしく、車の止めやすい所で良いからと言うと運転手はあるビルの前で車を止めた。車を降りるとすぐ近くの道路沿いに派手なレストランがあり、近づいてみるとシャブシャブらしい、寒いのでちょうど良いので入る。「蒙骨王」というモンゴル風レストラン。入るとすぐテーブルについた。羊肉のしゃぶしゃぶを注文するが、ダシは鍋が中央で二つに分けられ、一つは辛いダシ、もう一つは辛くないダシになっている。好みで好きな方へ浸けられる。羊肉の他、牛肉、野菜、キノコ、タケノコなどを注文する。メニューに「日本豆腐」というのがあったので、どんなものか興味があったので頼む。「日本ラーメン」というのもあったが、メニューの写真を見るとときし麺のような幅の広い麺類だったので、こちらは止める。その後出てきた「日本豆腐」は日本の「玉子豆腐」だった。ビールは冷えたのを頼む。「冷えたの」と言わないと必ず冷えてない常温のビールが出てくる。

余さんは、下に妹が居る二人兄弟。一人っ子政策の中国では珍しい。出身は湖南省。だから辛いものが好きで、しゃぶしゃぶでも辛いダシの方に浸けていた。大学は上海の大学を出ている。就職先をどうやって決めたのかと尋ねると、いろんな企業が集まって合同説明会が開かれ、学生達はそこへ行って、いろんな企業の業務説明を聞き、その後、関心を持った企業に個別に交渉するのだそうだ。

腹一杯食べたが、料金は、全部で百数十元(2000円)だった。店を出ると待客が7、8人たむろしていた。ホテルまでタクシーで送って貰った。

14日、減災展

ホテルから展示会場へ行こうとするが、通路のドアが全部閉め切られている。道が分からないので腰さんに電話して来て貰う。日本で買って来た土産をあげ、会場へ案内して貰う。建物の外を通るしかないようだ。会場に着くと展示場内も同行しましょうか?と言われたが、自由に歩きたいので断って一人で各ブースを見て歩く。

あるブースの近くを通ると、一人の女性が私の方を見ながら何か話しかけてくるので、そのブースへ行くと、「昨日

講演された方ですよね、静岡県の方が見えています」という。私は、静岡県とは浅からぬ関係がある。30年前に私が中国滞在中に故力武常次先生を団長に静岡県の訪中団が来て、力武先生を少し案内した。また、団員の川島さんという県職員が風邪を引いて病院へ行くのに通訳がないので私が病院へ同行して医師に説明した。このとき病気の症状を中国語で説明するのが大変だった。1980年には、朱伝鎮教授が静岡県の高校生の地学クラブ活動を視察したとき、私も同行した。その後、気象庁へ静岡県職員が出向してきたり、私の気象研勤務時代は、気象研のプロジェクトのため県の防災局の人たちにはいろいろ県内の情報を教えて貰ったりした。今回の静岡県の人は、建築住宅局の人が二人来ていた。市川勉さんと富加見俊一さん。静岡空港からインチョンへ飛ぶ便があり、それで昨日着いたという。そのため私の講演が聴けなかったと言いつていた。女性は滝沢みゆきさんと言ひ、貰った名刺には「日本酒をこよなく愛する会 上海支部長」と書いてあり、通訳をしていた。「通訳が必要なときは呼んで下さい」と言われたが、まあ普通の時は私は必要がない。しかし、静岡空港を使うため日本航空ではなく韓国の航空会社の便に乗っている。日本の地方の空港から外国へ行くのは、もうほとんど日本航空を使わないうから、日本航空は赤字になるはずだ。



米国領事館商務処のブースには、昨日会った沈霞(Jane Shen)さんともう一人男性と子供がいた。子供は、沈霞さんの子供らしい。子供も連れて来ているところが中国らしい。沈霞さんに挨拶すると「昨日の貴方の講演は面白かった」と言われた。日本からは、オリンパス、スーパーマップ・ジャパン、フォーラムエイト、神戸市の展示があった。オリンパスは、災害地での被災者捜索用ファイバーカメラを、フォーラムエイトは、高層建築などの被災時の3D避難シミュレーションを展示、デモしていた。中国の展示は、免震構造、免震積層ダンパーなどのほか、被災時のさまざまな支援物資の展示があった。一通り見て回って、入口に戻り、腰さん、余さんと一緒に3人で記念写真を撮り、展示会場を後にする。

一旦部屋へ戻り、ネットでホテルの近くに地下鉄漕宝路駅があるのを確認して出かける。4、5分と聞いたけど駅は意外に近く徒歩で数分で着く。途中にコンビニFamily Mart(中国語で「全家」)があったので、ちょっと中に入り、どんな商品があるか確認し、帰りに寄ることにする。

一旦部屋へ戻り、ネットでホテルの近くに地下鉄漕宝路駅があるのを確認して出かける。4、5分と聞いたけど駅は意外に近く徒歩で数分で着く。途中にコンビニFamily Mart(中国語で「全家」)があったので、ちょっと中に入り、どんな商品があるか確認し、帰りに寄ることにする。

1号線地下鉄で一番の中心地の「人民広場」へ行き、まず本屋を捜すことにする。以前上海へ来たとき、人民広場にある大きな書店に連れて行って貰った記憶があるので、そこを目指す。自販機で切符を買うと漕宝路駅から人民広場駅まで4元(50円)だった。中国は、政府が意図的に公共交通機関の料金を安く設定している。ただ、日本では余り無いが、中国では流通している紙幣でも古くなっているのは自販機で受け付けてくれないのが結構あり、注意しないといけない。それで漕宝路駅から人民広場駅まで乗ったが、7駅と遠くない。人民広場駅で地下鉄を降りて公園側の地上に出る。景色を見ると全然記憶にない。う～ん、本屋はどこか分からない。適当に歩いていると小さな入口の本屋を見つける。そこへ入ってみる。入口は広くなく、外から見たときは小さな書店かと思ったが、中へ入ると奥がどんどん広がっていて、かなり広がった。不思議な作りだ。まず、上海の地図を探す。何種類かあったが、分かりやすそうなものを選ぶ。その地図で人民広場付近の大きな書店を探す、見つからなかった。それで大きな書店を探すのはあきらめて、その本屋で地震関係の本を探す。ところが文化や人文系の本がほとんどで、理系の本はコンピュータ関係しかなく、地学関係すら無かった。もう本はあきらめる。



外へ出るとデパートが有ったので土産用の菓子を探すことにする。デパートに入り、食料品を求めて地下へ行く。ところがそこは靴ばかり売っていた！う～ん、確かに地下で靴を売るのは理にかなっているかも！？1階に戻り、案内板を見るが、食料品を売っている所は無いようだ。デパートなのに不思議！もう1件、近くにあったデパートらしき所に入るが、そこも食料品売り場は無かった。あきらめて、長女に頼まれていた店へ南京東路を見物しながら行くことにする。

南京東路の始まりには、上海万博のカウントダウン表示があった。あと168日！沢山の観光客が記念写真を撮っている。南京東路には、北京の王府井(ワンフーチン)と同じように観光用ミニトレインが走っていた。

写真を撮りながら進んでいくが土曜日と言うこともあり、沢山の

写真15：南京東路の西端。歩行者専用道の始まり。



写真16：南京路中央付近から西側を見た。若い女性に声をかけられる直前に撮った写真。

人で混み合っている。かなり進んで半分くらい来たところで片側が公園のように開けた所があり、南京東路の東側と西側がかなり見える所だったので、何枚か写真を撮る。そして、歩き出そうとする。「今、何時ですか」と若い女性が近づいてきて時間を尋ねてきた。中国携帯をポケットから取り出して「2時51分だね」と教えてあげ、歩き出す。すると「どこの出身ですか？（中国人に出身を尋ねる問いかけ方。外国人にはどこの国の人ですか？と尋ねる）」と一緒に歩きながら尋ねるので、「日本人だよ」と答える。すると「え！日本人なのにどうして中国語が上手なのですか、お父さんか、お母さんが中国人ですか？」と再度尋ねてくる。そのまま歩きながら「いや、両親とも日本人だよ」と答えると、「私は浙江省の**（知らない地名）から来ました。土曜、日曜は仕事が休みなので、久しぶりに南京路に来ました。南京路はとても変わりました。」と言う。私は以前、南京路に何時来たのか、すぐには思い出せなくて、適当に相づちを打っている。「私は***に泊まっているけど、貴方はどこに泊まっているのですか？」と尋ねる。どうも怪しいので「少し離れたところのホテルに泊まっ

ている。私は写真を撮るから、それじゃね。」と言って歩きを速めると、「私も一緒に行きます、いいでしょ？」と付いてくる。「いや、駄目」と言っても、「いや、私も一緒に行きます」と言うので、「ダメ、ダメ」と振り切る。少し離れて落ち着いて考えると、まず時間を尋ねたことからして、これはナンパだと気がつく。女性からだから「逆ナン」。う～ん、積極的だなあ、と感心する。しかし年が、、次女より若かったかも。このときは自分が着ている防寒コートが目立っていることに気がついていなかった。まあ、写真をかなり撮っていたから観光客には見えただろう。

その後外灘（ワイダン）の方に歩いて行き、近くなったところで、女性が一人、何か言いながら近づいてくる。私は、「要らない、要らない」と言いながら通り過ぎる。う～ん、今日はなんて日だ！一人で歩いていて、観光客に見られるなんて何時頃にあったか思い出せないくらい前なんだけど。その後、和平賓館の前を通ったので中を覗いたが、工事中で中はめちゃくちゃ。万博に間に合うのだろうか？

外灘（ワイダン）に着いたので黄浦江を挟んで向こう岸の高層建築群を撮影しようとしたが、天気が曇りな上、多分スモッグのせいで霞んでいて撮影条件は最悪。少しだけ撮影して、早々に福州路の少し南にあるアナベル・リーの店へ向かう。この店は、2年前に長女と上海へ遊びに来たとき、長女がガイドブックで見つけて行った店だ。そのときいくつか買い物をした中の携帯ケースがもうすり切れてきたので買ってきて欲しいと頼まれていた。この店は、ぼろっつい小さな路地の奥まった所にあり、流行のハイセンスな品物を売っている店があるとは、とても思えない場所にある。もちろん店内はとてもハイセンスな雰囲気だ。この店の名前を日経新聞の連載小説の中で見つけたときは、とても驚いてしまった。高城のぶ子の「苦海上海」だ。この小説は、上海の最新事情をかなり書いており、おかげでその後も続けて連載を読むようになった。それでアナベル・リーの店で長女に頼まれた携帯ケースを買った。ついでにトイレを借りたが、すさまじく広くて、何か別の部屋のような感じのスケール！。



写真17：アナベル・リーの店のある小路地。右の建物の黄色い旗のある所が店。

また来た道（中山東一路）を逆に北上し、南京東路へ。帰りは、食料品店に何軒か入る。店の中は大混雑！とにかく気合いで負けないように入って行って、人の隙間をぬって進み、上海土産を探す、なかなか良い物が無い。雷興しのような上海特産という菓子を沢山買う。2年前に沢山あった上海蟹味のポッ



写真18：アナベル・リーの店のトイレ

キーは見あたらなかった。夕方、冷えてきたので帰ることにする。



写真19：南京路の食料品店の中の人込。



写真20：漕宝路のファミリーマートのおでん。

地下鉄で逆に「人民広場」から「漕宝路駅」へ戻る。地上に出てホテルへ向かうが、夕食用の食料とビールを買おうと思ひ、Family Martへ立ち寄る。おでんが売られていた。中国人にも人気があるようだ。南京東路でもおでんを売っているのを見かけた。若い女性4、5人がいる物色している。背が高く、服装もおしゃれで、髪も一般人と感じが違う。店員がその女性らに「あなた達、どこから来た？」と尋ねている。一人が「北京から」と答えて、少し話をしているが、声が小さいこともあって聞き取れなかった。展示会場とホテルのすぐそばのコンビニに来ているからイベント嬢かもしれない。彼女たちが居なくなっておでんの絵付きメニューの写真を撮った。そして、土産用に小さなチョコを棚にあるだけカゴに入れ、缶ビールと菓子パンを取り、買物カゴに入れた。その後、おでんの所で物色していると店員が来て、「何がほしい？これはいいよ」というが、何なのか分からない。私は、コンニャクが好きなので探してみたが、どうも無いようだ。店員はさらに「コウ***はどうですか？」というが、コウが付くと犬の肉かも知れないので断る。「コンブは？」という。昆布を切ったのを何枚か丸めて串に刺している。しかし、昆布はいいや、と思ひ、鶏肉の串とダンゴを刺してあるのとあと2種類を頼むとカップに入れてくれ、「ダシは何か良い、辛いのが良い？」という。中国ではおでんまで辛いダシで食べる人が多いようだ。赤色のスープが横にあった。こちらは普通の方が良いので、「辛いくないのを」と頼み、カゴに入れているのと一緒にレジを頼む。レジを打った店員は「貴方は日本人ですか？」と尋ねるので、「そうです」と答えると「中国語が上手ですね」と言う。「いや、まだまだです」と言って、支払う。

買って来た物を持って部屋へ入ろうとするが、カードキーが効かず部屋へ入れない！やはり2日間しか有効にしていなかったようだ。フロントに戻り、もう1日は自費で泊まるようになっているはずだ、と言うが、ダメ。「私が払うと言っているんだから良いではないか」と言っても認めてくれず、「展覧会運営者に連絡して」と言う。仕方が無いので腰さんに電話し、少し説明し、フロント係にその携帯電話を渡し直接説明して貰う。それでやっとカードキーに延長処理をしてくれ、朝食券をくれた。ただし、今度は1枚だけ。

夜、ノドに少し違和感を感じる。多分風邪ではなく、汚れた空気の中を半日歩いたためだろう。とにかく埃っぽかった。

15日、帰国



写真21：上海浦東交際空港のラウンジの受付嬢。

絵葉書を書いたのでフロントへ行き切手は無いかと尋ねる。入口横のサービスコーナーで売っているというのでそちらへ行く。日本への切手は、6元(80円)だという。ところが実際に受け取ってみると5.6元の切手だった。差額は手数料のつもりなのだろう。次にホテルから空港へのシャトルバスは無いというので、浦東空港までタクシーを予約する。大体いくらかかると聞くと200元(2600円)だと言う。ちょっと高いが、大きな荷物を持って地下鉄乗り換えは嫌なので予約する。

ホテルをチェックアウト。部屋代は1泊650元(8500円)だった。タクシーは、空港まで181元(2400円)だった。空港での手荷物検査がかなりいい加減で、出し忘れたスプレー缶も素通りだった。前回の訪中では、北京空港でひっかかり、100ccより少しオーバーした120ccだったのに没収されてしまった。ラウンジでネットが出来たのでメールをチェック。紀行文を書き始める。そして出る時と受付嬢がきれいだったので写真を撮る。免税店で菓が売られていたので買う。帰りの便は、定刻通り。

ノドの違和感は、帰国後2日で収まった。